

こころの便り

第282号
令和5年9月

〒679-1434
兵庫県たつの市新宮町大屋六六八十二
株式会社新宮運送グループ
代表/木南 一志
kiminami@sinou.co.jp
電話 079-1-75-1212



新宮運送ホームページ

いい加減

記録的な暑さが将来に向けて大丈夫かと思わせるくらいの課題を運んできた今年の夏もようやく秋の様相を見せ始めました。今度は冬の大雪などの災害に備えて意識をしておかねばと思います。

プロの仕事は「いい加減」と表現しています。ちようどの加減を見つけていくのは昔の量り売りの目盛りのようにも思えます。少し多めに秤に載せて、少しずつ減らしながら100グラムという数字を導き出すか、少なめに載せておいて足しながらちようど100グラムで「毎度ありがとうございます」となるのか。それぞれのやり方や理論があるはずですが、これを見つけていくのがプロに至る道でもあるのです。

道というのは、「須臾も離れず」（まばたきする瞬間も離れることはない）が条件です。加えていくこと・減らしていくことのちようどいいところをつかみ取るわけですから、実行しないことには分かりません。どの程度かを理解できる物差しやはかりも自分自身の感覚で見出していくことしかありません。

プロの道は、そう簡単に見つけられるものではなく、判断するまでに多くの経験や方法を考

えては失敗し、失敗から学んで工夫を繰り返す。そうしていく中から少しずつ見えてくるものだと思います。ずっと考え続けているのですから、寝ている間も離れてはいないのだと思うのです。

どんな仕事であっても本物になるための道は、厳しく何年勤めれば一人前というようない簡単なものではありません。職人さんの世界に例えられることが多いですが、お茶汲みひとつでも大きな差が出るのです。

秀吉が信長に仕えるきつかけとなった三杯のお茶の話も草履を懐で温めた話も大きな努力の結果ではないでしょうか。

日頃から何を考えながら仕事に向き合うかで人生は大きく変わります。自分の仕事を誇りあるものに変えて、自分自身を育てていく機会にしていきたいものです。仕事は人を育てるためにあるのです。

被災地にこころを寄せながら

木南 一志 拝

尋常小學國史 上巻

第七 天智天皇と藤原鎌足②

中大兄皇子
鎌足と共に
た入鹿を誅し

蘇我氏ほろ



中大兄皇子と藤原鎌足

中臣鎌足は此のさまを見て大いにいきどほり、朝廷の御ために入鹿父子をのぞかんとはかれり。此の頃皇極天皇の御子中大兄皇子も、また蘇我氏の無道にくみたまひしかば、鎌足はいかにもしておのが心を皇子にうちあけたてまつらんと思ひしに、ある時皇子の蹴鞠の御遊にまわりあひ、御靴のぬげたるを取りてさし上げ、これより皇子に親しみたてまつることを得、ひそかに同じ志の人々とはかりゐたり。されど、入鹿は家のめぐりに池を掘りて城の如くにし、出入の時にはあまたの人々をしたがへ、すこしも心をゆるさざりき。たまたま三韓より貢物をたてまつることあり、大極殿にて其の式を行はせらるゝ日に、入鹿はまゐりて皇極天皇の御そばにありしかば、此の折を以て入鹿を誅せんとし、皇子は御みづからほこをとりたまひ、鎌足等は弓矢劍などをもちて御殿のわきにかくれるたり。然るに人々は入鹿を恐れてためらひたるに、皇子はまつさきに進み入り、遂に人々と共に入鹿を誅し、さらに天皇の御前に進み出でて、つゝしみて入鹿の不忠を申し上げたまへり。

蝦夷は家にありて皇子と戦ふはんとし、之につきしたがふものも少からざりき。皇子すなはち人をやりて、わが國には昔より君臣の別あることをいひ聞かせたまひしかば、人々ちりくくににげ去り、蝦夷も遂に家を焼きて自殺せり。

武内宿禰―蘇我石川……馬子―蝦夷―入鹿

NPO法人 愛ランド様の協力で障害を持つ皆さんが宛名貼り、封入作業をしてお届けさせていただいております。